

県中教研 保健体育部会だより

第 37 号

発行日 令和4年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 堀井 祥照
題 字 金山 泰仁 先生

豊かなスポーツライフの実現に向けて

指導主事 南 明子

人々に夢と感動を与えた東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会。その魅力の一つとして、男女平等や共生の視点から、過去最多の10競技で男女混合種目が実施されたことが挙げられます。卓球競技混合ダブルスでは、男子選手の力強い攻撃を女子選手がしのぎ、力強くボールを打ち返す姿に思わず拍手を送りました。また、パラリンピックでは選手だけでなく、視覚障がいランナーと並走するガイドランナーや、車いすラグビーのメカニック等、献身的に選手を支える人たちの姿に心を打たれました。

さて、新学習指導要領解説には、「体力や技能の程度、性別や障害の有無等にかかわらず、運動の多用な楽しみ方を共有することができるよう留意すること」とあります。今年度、各学校の授業研究では、男女共に運動する姿や仲間を支える姿が数多く見られました。また、参観した球技の授業では、教師が学級の実態を踏まえてチーム編成を工夫するなど、生徒が楽しみながら運動に取り組めるよう、様々な工夫がされていました。そのため、授業では、技能が高い男子が球技経験の少ない女子に助言したり、シュートを外した男子に女子が励ましの声をかけたりするなど、互いを認め合いながら、チームとしての一体感を高め、運動の楽しさや喜びを味わっている様子が見られました。

生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に向け、保健体育科の授業においては、生徒が、「できる」「できない」といった技能面だけにとらわれることなく、「運動の楽しさ」を感じることができるようすることが大切です。今後も、全ての生徒が、自分に合った「する、みる、支える、知る」等、運動やスポーツとの関わり方や楽しみ方を見付けることができるよう、研究活動を推進していけることを期待しています。

(西部教育事務所)

新しい生活様式の中での取組

部長 堀井 祥照

今年度は「心と体を一体として捉え、生涯にわたって運動に親しみ、明るく豊かな生活を営む態度を育てる学習指導はどうあればよいか」を研究主題として取り組んだ。①中学校学習指導要領が全面実施され、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善や、生徒の発達段階や特性などを踏まえた資質能力の育成を目指した取組について、研究を進めた年であった。②一方、新型コロナウイルス感染症が確認されてから2年目となり、感染リスクが高まる3つの条件（密閉、密集、密接）を避ける工夫を続けながら授業を実施し、研修主題に迫るための研究も併せて取り組んだ。

①主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善では、生徒一人一人に配付された学習専用端末の効果的な活用方法についての研究が進められた。例えば球技において、試合中の動きを自分たちで撮影した映像を確認させ、見付けた課題の解消のため工夫した練習方法に取り組ませる授業等が提案された。②新型コロナウイルス感染症の拡大防止対策を踏まえた授業の実施では、三密を避けるための工夫を取り入れながら実施する研究が進められた。例えば武道において、活動と活動の間に手指消毒をさせるとともに、用具を利用し直接相手と組まずに技を行う授業等が提案された。

今後は、新型コロナウイルス感染症対策を続けると同時に、ICT機器の有効な活用方法について探っていくことで、これらのことが日常的なこととして取り組まれるようになって考えられる。新しい生活様式の中、これまで培ってきた教育実践力と、最先端であるICT機器の活用がさらにうまく融合され、指導者と生徒の力が最大限に発揮されるよう、これからも研究活動を推進していく必要がある。

(高・伏木中)

第65回 研究大会の取組

新 川 地 区

3年 球技「バスケットボール」

指導者 山田 豊尚

「自分の役割を理解して、ゲームを盛り上げるために貢献しよう」を学習課題に、3年生男女共習のバスケットボールの授業が提案された。導入では、ボールを使いながらの準備運動から始まった。個人か



らペア、チームの活動へと広がっていき、体と心の両面で十分にウォーミングアップがなされた。その後、各チームでミーティングを行った。ゲームを行うにあたってのチームの作戦の話し合いのほかにも、他チームのゲームを「見る」「支える」といった関わり方についてそれぞれの役割分担を確認していた。

ゲームでは、男女の技能差に配慮し、通常のゴールの他にポートボールのように各2カ所に立つゴールマンが設置されていた。4チーム中2チームが対戦し、空き2チームはゲームを「支える」役割として審判や得点・応援等を「見る」役割として動画を撮ったり、相手の弱点を探したりしようとしていた。また、ゲームの振り返りとして撮影した動画を大画面に映し出し、話し合い活動に活用していた。

部会協議では「見る、支える役割をより明確に細分化にしてはどうか。」「男女混合チームによって、自然と身体接触が減ったり、空間が生まれたりしていた。」「運動量とのバランスはどうとればよいか。」といった活発な意見交換が行われた。中崎章子指導主事（東部教育事務所）からは、「生徒に役割を与え、各自がその役割を果たそうとする中で対話的な学習になっていた。」「生涯にわたって明るく豊かな生活を営む態度を育むという目標に向かうため、性別や障害を超えた共生の視点は欠かせない。」等、貴重な助言をいただいた。

相田 健悟（中・舟橋中）

富 山 地 区

2年 球技「バレーボール」

指導者 松井 暉

「基本技能を深め、対人パスができるようになる」を学習課題に、2年生によるバレーボールの授業が提案された。授業では、チーム毎にオーバーハンドパスやアンダーハンドパス等の基本技能のポイントを確認した。その際、グループの仲間に積極的にアドバイスしたり、クロームブックを利用し、動画撮影を行ったりした。基本技能確認の合間には、動画の様子を見ながら話し合いを活性化させる姿が多く見られた。振り返りでは、明らかになった改善点をクロームブックのジャムボードを活用しグループのみならず、クラス全体の考えを共有できるようにする工夫が見られた。



荒屋 輝久 主任指導主事（東部教育事務所）からは、冒頭で、「教師のクロームブックを使用した授業を実践したい」という気持ちが強く表れている授業であったことや、日ごろからの学級経営を主体とした、規律を大切にする半面、素直な意見が出やすい環境づくりにも努めている様子が反映された授業であること、安全面に考慮した授業運営が行われていることなどの助言をいただいた。

クロームブックを活用した授業については、「どのタイミングでどのようにして、何を伝え、何を理解させるのか」を、明確にすることにより、より効果的にクロームブックを使用できることを助言していただいた。最後に、身に付いた技能を基にミニゲームや簡易ゲームを行い、単元で習得した技能を確認する場を設けることの大切さについてもご指導いただいた。

上田 隆徳（富・藤ノ木中）

第65回 研究大会の取組

高岡地区

3年器械運動「跳び箱」

指導者 山本 隆

「自分や仲間の課題解決のポイントを見付け、互いに伝え合おう。」を学習課題として、3学年男女共習による器械運動（跳び箱）の授業が提案された。課題設定が生徒の実態に即しており、生徒が主体的に課題解決に取り組む様子が感じられる授業であった。

学習専用端末の機能を用いて、前時までの動画を蓄積し、練習や振り返りに活用したり、同じグルー



プ内の生徒同士でアドバイスをし合ったりするなど、自分の課題を明確にする手立てが設定されており、生徒の深い学びにつながっていた。また、同じ技に取り組む生徒同士でグループを組むことで、話し合いがしやすい環境が整っていることや段階的に課題解決に取り組むことができる場の設定がなされており、生徒の運動量や安全の確保につながっていた。

部会協議では、観察したグループごとに活動の様子を基にして協議を行った。前時で撮影した映像を用いた課題設定や技のポイントの意識付けが的確であり、生徒一人一人の技術の習得や知識・技能の向上に繋がる有効な手立てであった等の意見が出された。南明子指導主事（西部教育事務所）からは、新学習指導要領全面実施に係る、評価計画や指導案の作成における留意点について、解説を踏まえながら指導していただいた。また、授業における評価機会の設定について、具体的な事例を基に分かりやすい助言をいただいた。

保健体育科の学習は、他者との関わりが必要不可欠である。コロナ禍におけるペアやグループでの活動方法や授業の在り方を試行錯誤しながらも学習の質を向上させるための手立てを考えていくことが求められる。

筏井章太郎（射・新湊南部中）

砺波地区

3年球技（サッカー）

指導者 T1 新井 稜

〃 T2 前田 弘美

「空いているスペースを生かした攻撃をしよう」を学習課題に、体育館で3年生男女混合チームによる球技サッカーの授業を提案された。授業はランニングの後、グループごとに自分たちの目標を決め、小ボードに記入し、空きスペースを作るための動きについて再確認した。ゲームでは、男女混合のチームで4ゴールゲームを行った。作戦タ



イムでは、作戦ボードを使って各自の動きについて振り返り、次のゲームの動きについて再確認した。サッカー経験者が多く、空きスペースの作り方について指示する場面が多く見られた。また、ゲーム中は、それぞれの役割をうまく果たしたり、かけ声をかけ合ったりする場面が多く見られ積極的に活動していた。

部会協議では、各グループの動きから、本時のねらいや指導過程の工夫について意見が出された。勝敗よりもサッカーの特性を男女関係なく、グループのみんなが楽しむ姿やアドバイスをする場面が数多く見られた。また、男女別のゲームを次時より取り入れることでさらに積極的に活動できると思われた。

指導講話では、松嶋智主任指導主事（西部教育事務所）から評価規準の設定について、単元構想図事例集を基に地域、生徒の実態に合った年間計画、単元構想図評価規準の作成について助言をいただいた。

吉江 彰（南・井波中）

令和3年度 実践報告

体育理論「文化としてのスポーツの意義」

報告者 富山大学人間発達科学部附属中学校
鶴飼 雅信

今の中学生が、30代、40代になる頃、世の中はどう変化しているだろうか。少子高齢化が進み、AI等の開発は、人の生活（働き方と余暇の過ごし方）を大きく変えていくに違いない。今以上に、余暇の過ごし方が問われると言えるであろう。この時、運動やスポーツが、自分の人生を豊かにしてくれるものとして、人々の選択肢に色濃く入っているべきである。そこに、体育理論「文化としてのスポーツの意義」を学ぶ価値が生まれてくると考える。スポーツを固定概念で捉えず、多面的に考え、多様に関わり合い、楽しめるものであると気付くことは、保健体育科の本質である「明るく豊かな生活を営む態度を育てる」ことに直結する。

これまで、生徒は、1・2年時の体育理論の学習において、スポーツとの多様な関わりについて、「する」「みる」「支える」「知る」を囲む環境として、メディアや行政サービス等の充実が、スポーツライフのさらなる充実につながることに学習をしている。また、本校の運動会は富山大学附属特別支援学校の児童生徒と合同で行っており、共に競技をしたり、応援をしたりする中で、共生の視点を意識し始めている生徒も見られる。

3年生では、スポーツのもつ文化的意義（国際的なスポーツ大会の果たす意義役割、人々を結びつけるスポーツの働き等）を、知識として理解するだけでなく、自分事として考え、互いに伝え合う学習にしたいと考え全5時間で計画した。

第1次（3時間）では、間近に迫った東京オリンピック・パラリンピックについての話題を単元に取り上げ、障害のある人とスポーツという視点をもてるようにした（1/3時）。そこで、実際にシットイングバレーボールに取り組む学習を取り入れた。生徒からは、「バレーボールの面白さを同じように感じた」「ルールや道具を工夫することで、障害のある人と共にスポーツを楽しめそうだ」「運動があまり得意ではない私でも、楽しめた」という感想が聞かれた。ここでは、スポーツに対する新たな見方・考え方を共有するきっかけとなった（2/3時）。次にこれまでの体験を

シットイングバレーボールを体験してみる生徒



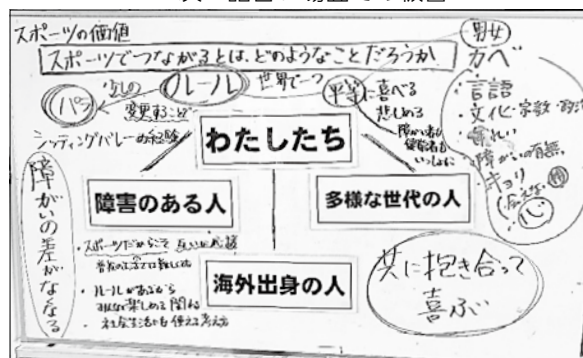
自分の考えるスポーツの価値をまとめる



もとに、自分の考えるスポーツの価値についてまとめる時間とした（3/3時）。

第2次（2時間）の1/2時では、1次までの知識や自分の考をもとに話し合った。KJ法を用いながら、互いの考えるスポーツの価値について情報交換をする中で、生徒たちから出てきた「スポーツは人と人をつなげる」というキーワードを学習課題に据えた。そして、「そのためにはいくつもの課題（生徒はカベと表現）があるのでは？」と切り返し、「人とは誰か」「カベとは何か」を明確にしながら、話し合いを進めた。生徒らは、既習事項や自分の考えを深めながら、国際的なスポーツ大会の価値等について理解を深めていくことができた。また、話し合いの終盤では、「ルールや目的を変えることで、スポーツは様々な人同士で楽しめる、という考え方は、実生活のスポーツ以外の場面でも生かしてけそうだな」という意見も挙がり、スポーツのもつ文化的意義にも気付く生徒が見られた。

2次・話し合い場面での板書



単元最後の授業では、高校での体育理論の学習へのつなぎとして、これまでの体育理論の学習を想起しながら、自分の理想のスポーツライフを考えた。「ライフステージによって、スポーツとの関わり方は変わっていく」そんなことを感じつつ体育理論を締めくくった。

本単元を実践して強く感じたことは、体育理論の学習は体育実技との連携が重要であるということである。体育理論は独立してあるものではなく、実技と結びつけながら考えるとその学習効果を増す。そのためには、年間のカリキュラムに体育理論をどのように位置づけ、何を考えさせるかといった視点が、今後の課題になると感じた。